



遠
琅
軒
記
地

15
676
2止





送
石
軒
記

下

遠
泊
石
軒
記

卜



官位

○新廣義門院 宣命写

天皇 我詔旨

良万

故顯子

勅御命乎衆聞食止

宣順貞内 亦備利美質

外 亦彰留性命早久逝氏

哀悼殊 亦深志仍迎周忌信

今贈榮爵

多万布

必致靈感 氏



愈護武運倍多故是以

從一位上給比賜布天皇我

勅命乎聞食止宣

延寶五年七月日

○石清の八幡社勢檢校職ハ有るより多れを公方一代若一代よりてかゝる梨東照宮の時の見在の位次より左次よりなりたるをみて後田中新若はち善法寺壇となりたる所直より次より

たすは社勢職を以てして藤次の有るよりなりて同文よりてにヶ所よりなるなりかの藤次の善法寺田中壇よりなりたる壇の家ハ絶也

○防鴨河使ハホウカント云カヨシ是故実也清書傳也

○固取衆之侍漫成

禁裏御太刀折紙銀子五十枚付臺

官銀貳百貫文

法皇御所御太刀折紙銀子三十枚

女院御所 銀子三十枚 白臺

女院御所 同断 白臺

内侍所 銀子貳枚 白臺

上卿 銀子六十目

職吏 同断

宣旨 同五枚

西傳奏 同五枚宛

副使 銀子貳拾目 外記 下ニツク小吏ノ類 覽書管ナトシ

御太刀代 同五枚 モ子テ出テ外記ハ後ス 小吏ナリ史ノ類多シ

雜掌四人 同四拾目宛

五位成

禁裏 黃金壹枚

上臈御局 銀子壹枚

長橋御局 同

大御乳人 同

法皇御所 銀子三枚

上臈御局 同壹枚

御匣御局 同

女院御所 銀子三枚

宣旨御局同 壹枚

綾小路御局 同

女御之所 銀子三枚

上臈御局 同壹枚

兵部之御局 同壹枚

内侍所 銀子四十目

上卿 同六十目

職吏 同

宣旨位記 同五枚

御請印 同六十目

中務大補 同

兩傳卷 同六十目宛

中務少補 同六十目

主鈴

同壹枚

御太刀代

同五匁

雜掌四人

同貳十目宛

受領成

宣旨

銀子五枚

副使

同貳十匁

上御

同六十目

職夏

四位成

禁裏

黃金壹枚

上臈御局

銀子壹枚

長橋御局

同壹枚

大乳人

同壹枚

法皇御所

銀子三枚

上臈御局

同壹枚

御匣御局

同壹枚

女院御所

銀子三枚

宣旨御局

同 壹枚

綾小路御局

同 壹枚

女御方

銀子三枚

上臈御局

同 壹枚

兵部卿

同 壹枚

内侍所

銀子四十目

上卿

同 六十目

職事

同

位記

同 五枚

御請印

同 六十目

中務大補

同

兩傳奏

同 六十目

中務少補

同

主鈴

同 壹枚

御太刀代

同 五枚

雜掌四人

同貳十目宛

掛緒御礼物

禁裏

銀子五枚

法皇御所

同三枚

女院御所

同

女御所

同

飛鳥井

同

三枚

飛鳥井雜掌

銀子壹枚

礼儀

○家塾の秋菜は染も内漏美もろき事と

禁中よりそは勿論なりとろきと先聖殿までの内漏

美も何家塾の式よりとりたきものとして家塾の

少法なり

○宮方の深ききやくは除も殺も字なりきより

と深曾本と万葉書よる法也

○近衛殿の歳男ハ存友勤くえるより主十郎表

向の上殿より出川す^膳師て何り三方の志中より
饅頭中より魚おと鳥高盛上より松の枝をとり
するの干肴午^{お房}夢芋を^{お房}取方より角より取りに
てさう^{お房}取^{お房}れ^{お房}る者の心なり十^{お房}二^{お房}りの^{お房}晩^{お房}より是より搦
とも^{お房}泳^{お房}て^{お房}肴^{お房}取^{お房}方より下よりなり

○東照宮慶長八年將軍宣下十年台徳院
將軍宣下東照宮の時將軍宣下より何役人
より出つ^{お房}魚^{お房}取^{お房}もの^{お房}い^{お房}お^{お房}せ^{お房}何^{お房}と^{お房}お^{お房}て^{お房}る^{お房}き^{お房}る^{お房}此

おきやう^{お房}儀^{お房}あ^{お房}は^{お房}と^{お房}なり于時出納翠菴え鼻
落^{お房}あり^{お房}市藏の役と^{お房}は^{お房}と^{お房}む^{お房}この^{お房}下^{お房}より分て出
納より催^{お房}もの^{お房}人^{お房}なり真継宮内市藏民部
出^{お房}る^{お房}人^{お房}なり^{お房}市藏^{お房}左^{お房}え^{お房}市藏^{お房}治^{お房}部^{お房}栗^{お房}氏^{お房}い^{お房}れ^{お房}る^{お房}
市藏の役^{お房}貫^{お房}首^{お房}より^{お房}誰^{お房}より^{お房}も^{お房}禁^{お房}中^{お房}より^{お房}も^{お房}は^{お房}何^{お房}分
と^{お房}此^{お房}に^{お房}人^{お房}の内^{お房}の上^{お房}首^{お房}より^{お房}その^{お房}人^{お房}の^{お房}里^{お房}亭^{お房}より^{お房}も^{お房}く
市藏進^{お房}く^{お房}と^{お房}告^{お房}この^{お房}式^{お房}の^{お房}翠^{お房}菴^{お房}申^{お房}次^{お房}は^{お房}は^{お房}より
居^{お房}へ^{お房}と^{お房}も^{お房}時^{お房}此^{お房}より^{お房}進^{お房}く^{お房}と^{お房}め^{お房}て^{お房}將^{お房}軍^{お房}宣^{お房}下^{お房}の

時即昇進くこととぬと也これと告人役とみふ
吉田の創幣使も吉田費遺のるを
来りたりりか候のる^役後事と

○改暦 宣下之事

右中辨兼中宮大進藤原俊方傳宣

右大臣宣奉 勅可被用太統暦由雖被宣下

止太統暦用新暦可号貞享暦仰陰陽暦

道輩者也

貞享元年十月廿九日 小槻宿祢判

右改暦より貞享暦と勅号とを下付鷹司の

右大臣の才にて消息宣下也

釋奠の古人行ハる時の唐物の靈像并唐

繪の十哲の像 先帝 後光明院の時まで

官庫に残りあり意林菴より御殿にみせらる

釈采と御再興に涉りありともある也

人倫

○細川出奔の父より三淵大和守と云仁執権より次の位よりともい仁又信長記より細川藤賢長兵衛少輔藤孝といふ書よりなりといふ川よりいしかく大坂より細川清康と云仁より細川嫡流より大坂陣より細川城中殿よりかく併嫡流より細川晴之芥川執事居の後ハこれよりい

以後信長記より細川六郎と云なり

徹書記諱正徹字清岩俗姓紀氏世云定家之再生也始構一軒於栗棘菴菴号松月後居山科曰松月追慕福之松月

○宗祇号自然斎又号種玉菴紀列人伎樂師之子也入一律院為僧与雪嶺月舟著述和漢聯句意雲老人後土御門帝御宇圍碁之良手也結菴于泉南自号可竹又以皓隱扁其居

相国寺周彦龍為之説
武野紹鷗初名中村泉州堺人姓源武田信光
之裔也祖父仲清死事應仁之役父信久幼無
依頼周流四方遂住泉州南鷗嗜歌述陪三条
右府十四年右府奏就緋衣之例又仕同列
守後戾慶泉南嗜茶又登大德寺學古岳名
一閑居士自号大黒菴
古田重能濃州人号古田織部

上林ハ元丹波ニ上林と云在雲なり其このこと
治一あり字治一の如く居る大田屋とて傳
かも清くもやうより茶を志するひも茶能取
り茶園を多く買て大茶師となすて代官
となり 忽ち六百石と賜字治一と上林と云
こゝに上林ハ藤原知新やまこゝに今の茶園
ふ代目なり 元祖ハ徳順と云其の徳順の子は
寛順也ハ新菴と云今や其の代伏見討

死の升菴ハ二代目

○定家と式子内親王と密通いし式子内親王
定家といは時の人なりよりあるものいふ
恥るふもわれと内親王の定家のときより
老婆なりきまは定家の淫いそとてん
たり

○里村は次房と云者と方の人なり多
霊湯院殿よりいふ——その方忍業を

あつては切なとらはゆるははるあ
人として侍るこい切の侍りや——はま
諫めりきともいふ——ははるあ
うなる人あるか頃のりおも侍るまは
もな——子あることある——ははるあ
附の連高師周極と師とてある品体なり
昌休と子昌也と子昌琢なりとて紹巴は南
都の中より微儀なりとて連高とてこのむ

○賀茂の松下一 後多羽院の官女をふりしれ
後多羽院の皇子をふりしれといふ其皇子は
隠岐へ遷幸以後誕生とも云又ハ清帝位の
内とも云名も賀茂の茂氏と云皇子とけり
清寵をかりこも一の宸翰数色を松下の
内室の官女も書けり 先ハ色なりこれを
二巻としてあり ね西蓮西寂等の文又一巻
けり 西蓮ハ秀能の子なりこの隠岐への流ハあり

秀能ともいふや殿ふして老人なりまね
たの北面人入居して隠岐へ徙き渡きて二十
所製衣一巻さして宸筆自画の款廿六文の祈
禱地ニ彩色あさきの袍市冠の中ニ入る
なる美之上ニ色紙形ニ御自詠三首^首けり 太の
とのたせ月ちるごとく鈴のふるごとく虫掃 毎年二
月廿三日正尚忌のうて終るあり^誰 誰
降るごとくて松下の庭のかまに

後多羽院を植ゆふと云楓有り大木あてま片
を朽たれとも上のうら目をまゝと有り傍よ
後くやうくたる楓有りこれも二圃ありて
枝ねえおふして鞠あひくきと云是はいま枯
たり右の宸筆も楓もさういふ残れとて
法皇御詠をとりて頃の奇人應山と鳥丸
光廣通村氏茂等各題して楓のるをてよ
しとく短冊一くし有りさういふおともなり

氏久と云上賀茂の松下の一代あて
後多羽院の序子に氏王と幼名を云は氏久
なり氏久を久経といふ後多羽院の宸翰
共の序子のおいふ代の名うきうてなり

○大職冠の像も唐冠とくちも九条殿くち
るはさるゆゑ三山冠なりこれよきなり

○三猿院は諱同徹を初春屋玉師のけり

○大隅高橋は 禁裏のちま人の庖丁人なり生

約を信ふいうやと云々ハコ方の奉公人まで上
洛の時京の庖丁人と引連て二条の城に召
と調福^福田も庖丁の家までえ来漢崎の川端ふ
位来る根本ハ丹阿の人なり
地下内侍やうい禁裏の伺ふれ内侍るれも
帝^帝前一出ぬと云帝前るう。一對て地下こ
凡禁裏ふは小路の名ハなきこの之をうふ
西之条殿の西洞院の息女と田内の小路と

件ふれたハ張るうとあるうこそ忍の妹
はまう近侍玉垣と云

○
音傳草木ノ
葉初生ハ
國ハッ音
亦蒂
蒂ハ有之者
蒂刀

蒂^{エニグ} 人生希義古侍ういふと高き我目と
長き我目ととてお洛を古侍躍と云て種
とまうとて念佛おとりとて後さた刀
派名とぬきとてさう合ていさとおとるこれ
希義と池をさうせくあらせし余風之
古侍一条とある高き長きお院とてお洛を

木下道正菴系譜

懸山左馬場智正位下後系於隆英
と云人何り居京師木下故曰木下系極相
玉為光九世孫頭監男也清和谷亞相公定
為養子博學廣村官家從學者多曾競
納言不遜叔從三位任左馬場智治義年中
外祖父源仲家戰宇治死自是遁世名道世
道正室治二年死ストヤレハ治正トハ
六十歳不ト云ハ说不實

永平寺元祖道元入宋道正亦從之參天童
如淨禪師一朝庭前有鷄聲淨曰會麼
道正言下者悟拜而去于時与道元催
歸棹路歷深山于時道元身躰困倦已
而絕死於老嫗忽然而現与一丸藥服之
於是忽蘇道正問嫗何人也答曰吾是稻荷明
神也助法器而与藥于時道元請傳其
法於道正濟法孫曰之神授之則神仙

方病解毒曰是也道正歸朝稻荷社
菴中二建之今調合解毒道正寶治二年
七月二十四日死葬于真正寺道正菴弟
二世左兵衛督從四位下隆實法名默外
紹圓弟三世治部大輔正四位下範房法名
惟寧道琢弟四世典藥頭正四位下忠俊
法名芳岳良信始為宦医晚年剃髮稱
元祖名稱道正菴又曰味杏堂弟五世宣

安字愚傳弟六世睦用字寂然為義詮公
之侍医是時薩州玉菴山福昌寺始祖石
屋祖師掛錫于瑞龜山蒙山和尚而居道
正菴睦用所設之寮舍共參究鳥津家
五世道鑑亦千里命駕居道正之寮自
是與島津家相親自二世至六世不知葬
于何處弟七世一伯悟弟八世玄榮別
叟弟九世昌順明室是八中院大納言通

氏男玄榮養之為子弟十世康琳撲堂第十
一世道壽松隱大內氏贈三品政弘朝臣男康
琳養為子是為竹居禪師之媒妁第十二
世立教他誰實四條亞相隆量男松隱養
之為子弟十三世了意了絕殊精醫術正
親町院 勅為侍医叙法印聽昇殿第十
四世宗源淨本叙法印第十五世玄養文如
叙法印第十六世一貞直翁第十七世宗固

坚岩于時関原役島津卜義弘兵士三人部
將二人逃道正菴家康公尋之宗固深隱而
不出世治後送薩刈竜伯公中納言家久感
之賜祿于宗固第十八世休甫推手室実佐々
木一網男宗固養之為子即今卜順父也丸山
安養寺関山宣阿上人一伯族弟也故一伯建
此寺為累代之墓所自一伯至休甫葬于此
元祖道正榜并歷葉榜建瑞竜山今道正

者く田代の住人く田代晴具と云人侍りて医こ
ま末田代流と云医くるる之喜るくも久我りて
医^医とちりて住る田代流と云

○医者僧官より参 内より氏の町士佛り始り
治部卿を法^やりて卿名を分て呼と門跡の内
治部卿を法^やりて法親王^りれは内坊官の法
京ハ治部卿るく分て云なり殿法京良忠
るくハ二条殿下の子なりくも主殿の字と云

大納言律師なり云ハ親の官を上くちりて
堀川と酒屋を有と云く者なり放浪^浪なる性
質なりと云れと云く子と云くく
二条殿一乳母と云く康道と守立ツ二の乳母ハ
京^京ハ小路之内と云れと云く二条殿の家司^司
の古き氏の小路と云くくむきくその乳母家
と云くく後家く久くく使ふ高桑人の
女^房なりと云く女房^房と云く子と云くむ婿ハ

大宮大藏入^乃采^雅騷^々室^々妹館林の母^公慶
 昌院殿なり^{この}兄^共春日局江戸^一日
 乃^て東^乃嬪^ハ御^意入^妹妹^々残^残里^々館
 林殿^を産^りこ^のも^も館林^ハい^くハ^百石^となり
 宮内の子平^に帝^ハ日^もふ^となり^{この}康^乃の
 乳母^と後^く之^位と^いふ^{この}人^浩構^{なる}ふ^てて^る
 の^後高^乃森^の女^れ産^る子^とう^れ吾^子分^々里^々

家康公

女子 保科 彈正室

松平 甲斐守

松平 隱岐守

五郎

因幡守

佐渡守

河内守

女子 服部平藏室
号松尾

遠江守

隱岐守

正行

河内守

女子 酒井備後守室

女子 堀田上野介室

女子 松平中務室

越中守

女子 松平土佐守室

女子 中川内膳室号光顯院

信濃守

女子 酒井阿波守室

美作守

女子 阿部對馬守室

能登守

定政

吉五郎

女子

生助

女子 松平備後守室

女子 酒井修理室

主計

石見守

女子 松平薩守室

女子 阿部備後守室

越中守

女子 松平備後守室

豐後守

女子 酒井雅樂頭室

攝津守

女子 松平肥前守室

民部

女子

女子

肥前

信康公騰雲院岩越隆起

青龍寺淨土宗也葬三河二俣青龍寺九月十日

岡崎三郎信康

母今川義元老臣關口刑少補女也

信康二十而生害 延宝戊午六年當百年忌

女子

母右大臣信長公女

小笠原兵部少補室

自此下三郎殿ノ下ニ

記スニ母号築山殿

葬于建長寺中

西來院今川家老

臣関口刑少補女

也三郎殿御生害

女子

母同上

姫路侍從本多

忠政室

越前少將忠直

一伯

松平伊与守忠昌

女子

毛利長門守室

出羽守直政

大和守直基 大和守直矩

女子

池田三左衛門室

小糸氏直後家

秀忠公

上總介忠輝

但馬守直輝

下野守忠吉

尾張大納言義直

源教九月七日逝

中納言光義

女子八条智仁親王三男幸九室

紀伊中納言賴宣

南竜院正月十日紀列卒

宰相光定德川綱教常陸介

水戸中納言賴房

号源威 寛文元七月廿九日於水戸城卒去

女子

賴房養母榮勝寺五百石給首為紫衣

左京大夫賴純

右兵衛督
中將綱美
撰津守少將
美行
出雲守少將
美則

右京大夫賴常

光景

讃岐守侍從

宰相光圀

少將

網條

女子

秀賴公室後本多中書室号天寿院

刑部少捕賴光

数馬

女子 京極若狹守室

伊織

女子 小松中納言利常室

左門

女子 越前一伯室号高田殿

牧之助

家光公

長門守

女子

女子東門院

女子 松平賀守室

駿河大納言忠長

女子 松平賀守室

保科肥後守正之

筑前守正經

女子 稻葉丹後守正勝室

某 重四郎

女子

松平筑前守光高室実水戸頼房女
号清泰院貞享五年九月廿三日世三面忌也

女子

尾張黄門室号千代姫

家綱公五月八日薨

龜松

信濃守綱陸

出羽守

上野介近栄

但馬守直輝

甲府宰相綱重

徳川
虎松元

女子

松平大和守室

鶴松

女子

佐竹右京亮室

館林宰相綱吉

右近

越前守

越前守綱昌
実中勢少浦
昌勝子也

越後守光長

中書昌勝

下野守綱賢

女子

松平越前守光通室

兵部昌親

女子

伊達大膳室

三河守綱國

女子

高松彈正尹好仁親王

女子

九条左府室
号廉貞院

○ けりまぬー けりまぬの刀自と云奇の下句媒の
字とけりまぬとむ恋の歌あく媒の刀自とい
下女来ぬあく参会不調侍ちり命を
失ひけりんとふまゝの大社の神主の内
媒采女と云人けり氏あり

○ 後江相公朝経あり 平朝文粹く前後たふ
あり 中書王後中書王との類なり

○ 元和五年 九月十二日 卒 惺齋

○ 刷雄押勝の子なり

○ 侍宵小侍従ハ幡幸清女

○ 通村卿に戸浩のくは寛永初幸のくは日記
と侍尋の時くこの家ともなるなり
冷多為頼り武家ハ初幸のくはく大老
地定家の一筆のけりあきと通村侍奏の時
法皇の命あて写さるを後法皇よ
りく通村へくさるを初く為頼を死去を子ハ

却がうそ愚なり。また時の後谷、あちねり、まじ
冷泉、あつて、ついで、後、えとよとの、る、こと、は、ふ
彼、毛、物、なり。為、頼、く、海、村、より、之、を、と、い、ひ、と、
く、あ、さ、う、い、は、る、あ、さ、う、大、き、な、う、の、に、な、り
周、防、殿、へ、訴、へ、り、れ、ども、あ、ち、遊、く、い、ま、こ、し、周、防
殿、と、通、村、より、城、へ、さ、れ、ぬ、さ、う、い、ま、さ、う、人、と、一、生、
あ、り、る、や、の、う、へ、と、その、傳、奏、の、う、ち、く、は、皇、家、御、ふ
す、く、ら、に、戸、へ、の、つ、あ、う、け、も、な、く、是、と、す、い、に、戸

こも、周、防、殿、も、傳、奏、の、方、と、して、武、家、へ、さ、う、戸、に
ら、る、へ、さ、る、う、と、云、て、傳、奏、を、あ、ち、う、ち、う、さ、れ、も、か、く
せ、の、主、命、あ、り、是、能、な、さ、る、う、こ、の、る、あ、と、を、い、
う、い、ま、い、う、い、ま、い、う、と、て、に、戸、へ、さ、る、に、み、ま、し、其、分
あ、ち、に、戸、へ、さ、る、と、して、さ、う、さ、う、後、の、り、せ、る、こ、の、後
内、府、より、さ、る、う、と、又、れ、く、ち、ら、る、是、ハ、カ、い、う、う、り、人
あ、ち、さ、う、さ、る、う、と、是、ハ、例、に、な、り、て、さ、う、は、内、府、より、な
ま、と、に、戸、へ、さ、る、に、戸、へ、さ、る、の、城、と、その、座、も、大、城、
低

大段の坐よりハガリ——さうりて庭村礼とヤ——
うれゝ又うれゝ例——なりて坐さうもなり

○茶屋の宗右え江田市郎ハ法族——て情延と
きて親ずてハ云はの者少て侍なり浪人——て
京一まり子江市郎ハ新町より三条より二町
目の東六の町人——むこさる。うれゝうれゝも
家康との京よりの時江市郎と茶屋と云稱号ハ
新町のいさる場あり光原院美輝と云と

井
本

うれゝ馬とせめうれゝこの茶屋より茶の湯城
ありあり市郎とけられてか——茶屋さある
○近江大溝の邊う雄斐と云あり佐々木兵部と
云人ありうれゝ馬と云うれゝ六角の末江の
破産と云うれゝとて生をれう茶屋も所持
一説——ハ敷山の木小姓とてあり——ハ別の内小
て佐々木の氏と人よりいふうれゝ佐々木と
云うれゝ敷山のまの僧方とて佐々木の系

ふとつてつううつちるも云

○狩野之甫と大岡時代の畫工山樂才子とて狩野
とすとなり又浮世又喬と又後友氏と云喬と云
とのりこの頃よりが後大坂陣の比のみの西流
の画工なり之甫ハ武志畫りきなり浮世又喬ハ
荒木縁列子とてあり越前一白殿侍目々け
られりハ戸ノ住ハ福富^{作富}立意のみと
よく是の

二本寫
作富

○南都の幸徳井ハ吉備公の末子とて古より南都に
住て唐と云ふ迄ハ古ゆつとてさうてかげも
なり具福ちのん経多幸徳井名座のま
今より福富町の吉富のりハアカンホウと云ふ
りりうり幸徳井ハ先祖とておの所吉備公の
所と云ふ吉備と云ふ塚とて今よりりこの邊り
幸町と云ふりこの処ハ幸徳井ハ古より
所ハこの処なりされとも今も其面と云ふり住を

是は、いふより南の方より高畠にて南東より北西
舜水の水戸殿より石室唐人の孫朱天王（手）ハ
黄遂生（四十三）黄憲章（四十五）といふ逐生を表兄
也。いふ所の者也。

○妙寿院惺高の暫恒の相国寺の院は普廣院也
○高臺寺殿は七十二文にて九月六日を祀りたり存
生のうちハ有髪の白髪とて、後村庸軒幼少の
時より細りてより石室菓子とていふに

見下ハより白髪とて御入となり歴々の後家
よりても尼とてハなかりし人きりのものなり

秀吉より六十二文にて八月十八日に薨てり

○攝津国丹生郡山田村より粟花（ツ）落理（ユ）と云ふ
よりいふ祖ハ廢帝の時代の者なりて横萩の太
大に豊成女に當麻中お姫の妹に白勝の前と
云宮女に愛着して奇を産みておのるより上
よりち一名奇なりといふ女中と云ふなりこの山田

の店一むきこむその人のあり理を属し一を子孫に
今も所を居てこの変りて味敵の支配也一
この理を属し味敵の宿しこの女弟領のもの
天子より太刀作り太刀作を極もるるも常の
刀とてふいふものなり詔をるるも
うき古の舞房に化と云傳ふ歌に
さう草統の太刀作りてさやハ草のぬき
わハ赤銅化うこの屋敷の卯に宮なりこれハ白漆の

のあれ安々天子準してなるものこの傍に平
地として切ふらるるもこれなりてなりてこの
所より五月梅雨に必る涌きこきなる墜栗理を
と自分あるるなり

○古代将監畫工ハ十代ありハ信より金足
を祀りすも教よりいへも家隆の兄猫間中酒を
光隆に祀り光信子光茂光重ハ所よりこれ
に補但よりありとや経教と云ハ光信より二三代

先ずて上より

○土佐の元祖ハ猫間中納言光隆よりけりあせも
代ハちと久保日本公の絵の古き大方土佐家と
いふものなり光信光茂二代より上より光信ハ古
法眼元信よりなり光茂ハ故土佐家ハ画と
いふ家も實に残りてあるものなり光隆ハ土佐の
成る今の光起再興のやうなものなり土佐の
畫ハ印ハあるもの也

○土佐の先祖ハ恒久ハちと高き光高光長ハゆゑに
この土佐家時代のものより父子の畫よりなり
さて廣國光重光信光茂とけり今ハ光重
ハ宣りり光重ハ苗麻の縁起の筆者也

口宣案

上々
三條大納言

享祿五年六月九日 宣旨

從五位上藤原光茂

宣叙正五位下

藏人左大辨急秀奉

^上小倉中納言

明應五年十二月五日 宣旨

刑部少輔藤原光信

宣轉任刑部大輔

藏人左大辨后原冬光奉

鳥丸也光信ハ後ハ四果ニ
叙ト云

久我中納言

義應三年六月十日

宣旨

藤原光起

宣任左近將監

藏人頭左大辨昭房

奉

細川家ノ元カ是モ東山殿ト云也

繪所預事早任 勅裁旨右近將監光信領掌不可相違ニ狀如件

文明元年十月九日

繪所預領丹波國大率事早任去月九日所判之旨可被作付右近將監光信狀如件

文明元年十一月廿八日

内友淳正忠厚

細川勝元

以二条殿ヨリ

宣叙正五位下

藏人左大辨急秀奉

^上小倉中納言

明應五年十二月五日 宣旨

刑部少輔藤原光信

宣轉任刑部大輔

藏人左大辨及原冬光奉

鳥丸也光信ハ後ハ四果ニ
叙下云

久我中納言

義應三年六月十日 宣旨

藤原光起

宣任左近將監

藏人頭左大辨昭房 奉

細川家ノ元カ是モ東山殿ト云也

繪所預事早任 勅裁旨右近將監光信領掌不可相違ニ狀如件

文明元年十月九日

細川勝元

内省彈正忠友

公方家ノ元ト云

○作、本兵部ハ近江の雄略とて坂本サカのわがより
信長ノブナガの祖父義勝ハ信長公の婿むすめなりこの子義資
美原陣ニ死回ニ成りて使者とて味方となれと
有り曰はる和して争ふとてこの美原の戦とて
書状と破りて使者とよめば人初妻ハ早世後世
この兵部おきて之の時父死を家の書との
る西教寺の僧ニ頼みてこの子成長せしめりて
くれと有り父死しては頼まなくなれ堅田の百

姓ニ養子となりて便中成長の後吾実ハ父の事と
有りて有りて出でて西教寺の僧ニ家のうきものあり
里とて実てより後して今兵部家を興へしと有り
この祖父ハ秀吉との氣とへく醍醐の花見ふも供
幸次あり又ちも有りて聞説醍醐花世界見来此
雪乾坤の詩もこのに作あり即自筆とてこの詩と
く記し銘ニ秀吉との後自詠とて自筆とてあはれに
たる今兵部家を有り家康公のうきに立自筆

何へたを廢子系極若狭守大為なりまより上より
うせしき次して一世不仕合なりこの信七の
婿より一一人を織田常真後よりうて居り
しなり

山田道悦とはか山田の人ちまゝ所々て古及古を
接ひ何れめ江源武鑑をいより誤のとなり

○慶長七年己卯四月十二日紹巴卒七十九才

○寛永十三年丙子二月五日昌琢卒六十一才

○阿佛、後の夫は為家吉子の為相と家とせんとの祈詔
かむくくして彼地にて死安嘉門院に系後日阿佛

○延宝二年十月七日探幽法中七十二才卒去

○宗祇氏ハ飯尾くハ之好より出て八十二才卒家祇
禪師と云りこれの参徒よりなり

○種玉宗祇 聰雪 道遙院 月村 宗砌 夢菴 肖柏 耕閑 兼載

孤竹 谷宗牧 宗屋 宗長

○紹巴氏ハ終よりれと凡十のひとこも初子巴ハ周

兄才子板々昌林々字ふゝすちめ成ふ昌叱を巴養

て己々女と一訴するところの内、玄仍生る是より

此の河も跡々なるありくのみぞ新在

家のかゝの家へのきて別家となる玄仍一昌此の

女をとりて室と爲し是より玄仍ハ里村と稱す

玄子玄一玄東

矢死才二

玄凍

方三

玄的

弟

妙三

外科

夢由之
室也

玄仲

玄祥

紹甫

紹甫、仍喜
養て子とて

○京祇姓三善氏飯尾菴号種玉斎自然又稱見外

稱光院應仁二十八年辛丑生紀刈彩河依國

之禮窩一城將潰其父呼一傀儡師托此子傀儡

師披兒於木偶箱中遂投高山民部少捕某

宗 德
砌 早

高山者山名霜臺教豐朝臣之家臣好連

哥長而師心敬

心十
院住

友專順

春陽坊

飛鳥井雅

親殊受之

木邑号柏木殿

以定家之色紙贈之或

時與平賢盛催西吟

入道 宗伊

賢盛為細

川政元文重臣文明三年

于時宗祇
四十二又

辛卯於豆列

三嶋傳古今集秘說於平常緣

東下野守
左近大夫于時

竹一少年

後号
素純

有風恙禱神明得効王鳩

十句是也和哥之道迨于左金吾基俊以為

家學基俊傳俊成々々傳定家々々傳為家

々々傳二条為氏々々傳為世々々傳頓阿々

傳經賢法印々々傳亮尋僧都々々傳亮

孝々々傳常緣々々者東下野守益之号素

子也謫在関左祇往遊之祇嘗作竹林抄一

條兼良作序應多々良政弘之招有海西

紀行又作新玉集竹林抄ノ七人ハ宗砌賢盛

霜臺
軒主

心敬行助

總持防
法印

專順

不斷
光院

智蘊能

阿是也

聽雪翁藤実隆耕閑斎猪苗代平兼載待月

軒柴屋宗長為連哥友櫻井中勢少捕基佐

恨宗祇不入作筑波集之中後室九相津仔

より鳳輦とらをもつれ。厨子となりてありこの
室と唐紙と云淀川のいろとあり云々今無瀬
と云小名して御殿のあぐくみと川の橋と
よりいふこともまうといふありこの川の岸より懐
の方へありありと橋ありこゝにもまを無
瀬橋と云ふなり——いふて水無瀬殿と云ふ無瀬
水無瀬殿の一代々実子なり——称名院の子とまふ
それより成^後の親なり入るて無瀬といふ

これより秀次公の頭より多路もよく地下人々せん
よりいふ——としてこの人々將基の馬^駒れ書なりと申
なりなりそれより家のやうに成るなり

○赤松氏も平兼盛の女より上東門院より
後奈良院の勅書より加竹先生より遊興より文武二道
不可抜なりこの加竹の孫より笠原遠江殿より
ふむ細川越中殿の孫より玄治の皇子より
これよりおつて申は古には醫者より先生号を

るる所りまもぬ領ありと云ふ是れされも
この寺文雅も書医者とも云ふはるの上後高良院
の時代ハ禁中裏微のときうて大方のるる中上
次方よりたしうやれ先生号と云て定りたる
るるはるも今先生号ハ潤すしるるも常刀先生
と云ふるるるり是ハ百官の内ハ常刀を巫
佐なりと云ふて代り先生と云て云ふるるる
攝家歴の子と想領と云ふと云ふんと先生

と云ふハ大方定る次師と云

○万里小路大納言藤房卿遁世の後入居して筑後
のいすめしるる居るるるるるるるるるるるる
墓ありとなり妙心寺二代目の授翁る友房と云ふ
世と通る人妙心寺なりとの二代目なりと云ふ
しるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
中納言友房妙心寺六傳と云ふ人なりこれら法親志
て開山の法と云ふるるる授翁あり世ハ万里

小路友房と云も旧名なりをなりを授翁の
又路と萬里小路友房の又路とく似るもの
万里小路淳房の物知りなり惣別古一ハ門時ニ同
名多一地下ハともりも通るなりなれども大中納言
の人一ハ同名ハ不思縁なるなり

友房死云
九十九とあり

宗建按万里小路藤房より外ハ卿補但もみ

○地神経と云て筑紫ノ盲人ノかみといひ祈禱
そとれと敷心ノ学政ノ正覺院より法平と云

そ又院号と云ふれを座頭中より祈詔して正
覺院閉門九次の正覺院近江山城江戸方とを
寺拂座頭中よりして小瀬と云れ下寺

地神経と云む釈言又
盲人を寺と云ふ云

盲人のうちに地神経と云一流有りて金とく
持のやうく祈禱とて通る者有りこの志は若
る衣ハ廟参衣と云ふ家の若る道服の類なり
大徳ちうくの出世の若る道場なりと云て

衣有り裳なしとの衣、ぬぐれを畧衣有り
盲人中間に職変に人なり人、限りて
え、こゝろなり形、兼用共相とくぬぐれを
又、人の老とく一れ

中、此の内より六流有り師乃、妙親、富、清、玄、正と云
この六流、都方とは内師乃、妙親、流、ハ、慧、昌なり
富、清、流、と云、検校に人有り、玄、正、流、ハ、人有り、然、
二月の石塔と六月の涼と、富、清、と玄、正、と一人

片、有りて、富、清、とく、石、塔、ハ、富、清、流、ハ、
涼、とく、玄、正、流、より、師、乃、流、妙、親、流、より、毎
夜、なり、岩、和、検、校、ハ、妙、正、流、なり、さて、ハ、坂、方、ハ、大、山
妙、正、二、流、ハ、れ、も、ハ、六、流、なり、職、変、ハ、三、人、有り、如
一、城、光、と、検、校、と云、り、都、方、坂、方、ハ、大、法、也、
の、ハ、流、菊、流、の、類、なり、座、次、の、者、ハ、一、の、開、基、ハ、光
孝、天、皇、の、侍、子、兩、方、の、侍、子、より、形、生、傳、と
ハ、中、古、より、い、時、まで、ハ、い、ず、ハ、流、の、別、と、ハ、六、流、ハ

通波より別々守誓津ハ山王の内ハ一社なり
是と申すも其後像二幅ナキ所なり
妙高の像と云ふも其後像二幅ナキ所なり
よりての神之内澄みておろすなり
陪堂 邏斎のるゝ之佛經の字之ものなり
のり也

頃阿と云條道場の傍東山双林寺暫隠れ居て
草庵集と作り 今新ニ双林寺ニ墳を築

おろ墓の側より

○傀儡とクツと讀そ人形も一のるゝ傀儡
棚と書てテコホウと讀むなり

○妙壽院藤欽夫醒窩ハ坂杏菴先生の師松
と愛を本名ハ醒窩と云なり 初相國寺妙壽

院持住

○宗達云醒窩名ハ肅冷翁為の男なり

○細川忠斎ハ正親町院の侍子と云クワイタイの

○后と三淵氏と云ふ所れにてするを細川刑部大
浦卷の子となりて細川氏と名まゐるなり

○三善清行居逸ともうさるる所あり清行
とよむるなり又中院龜統ともうさるるなり

○龍山と云ふ所なり清座と云ふ所なり院殿もその趣
い人武家と云ふ人多くまゐるなり聖心も

○可くといふ言ふ疑思召ひて徳善院并菊亭
殿様と申すといふ人謠言するて日向一流罪を問

る今の寺所の趣あて方より清座の内にふておて
庭狭くなりなり庭邊庭知りのうち二百ふ

その東山清土寺とて取らるゝといふ慈照院も

無住庵竜山と東求堂と入まゐへり東求院と

云浄土と云ふ所のなりて徳善院庭恨むる

果しに座ありと云ふ申かゝるもむねより浄

土寺乃知れとくは今の枇杷座とて三百ふ

なり

○猿轡ハ京ニ六人有り而テ何リテ亦ハ不入
京ニテハ因幡業師の町ニ住ミ山本七島を馬ト
云子トモ名キトモ一人住ハ又振エ依見のモ京ハ
不入他亦ハ不入公若ナリ依見のハ装束をさうせて
まりハ京のハ内裏ニテ中ノ時ハ急ニ装束を
正月アリ内裏ニテ中ノ時ハ祝王ニテ誕生の時ハ
内裏ニテ中ノ時ハ祝王のハ不糸帯モ町ナリ
テテ他亦ハ不入ナリハ六人の者猿を六疋

テハ内裏ニテ中ノ時ハ祝王のハ不糸帯モ町ナリ
○雪舟ハ備中赤瀨ト云亦の人ナリ雪舟ハ
テテ田間ニ竹藪ニ住ミテテテテテテテテ
木下屋の領葺守の内ナリ雪舟の法の師ハ初
戒師ハ備中井の山宝福寺の僧ナリ 東福寺流
ナリ小年ナリ 畫ニテテテテテテテテテ
祇テ書ルテ堂の縁^縁の柱ニテテテテテテテ
タニ及イリテテテテテテテテテテテテテ

まは雪舟と鼠奔りくくす鼠奔に逃く
早く索とりてたれまの鼠少てハなく一日
ちてゐる迷惑さく涙をかきとて涙を
是とて鼠とくくくくく鼠くくくくく
師しとてハ畫入神今ヨリ畫とやうく好
のりて承上よきなりとて柳上京相とて
ある僧くくくくくた街供徳老禅師の弟子
なる僧祿なり即年陶豪くくく又雪舟と

漁樵斎と云く記と建長ちの玉隠永興く
即永興のけくたそりて雪舟の法
才子加多宗測と云くこの宗測と雪舟よ
里の洗明の文けり是なりてハ雪舟の文ハ
そき入唐して明の季在と云畫工の彩色の
そと傳授しられと云くを書載てあり
周文ハ字元徳これと畫侶雪舟の師とて
○あり徳と云禪宗けり五十有餘とて痢と

煩久病の婦を三十余人の才子初ハ看病を
れとも後ハ何うてより其夫人なり。其後の後
より其夫人とて才子と何れの日比親切とあり
才子同宿後ハ一人も不道徳家の子才子に後
ハ其夫人のことう子とありてハいふなり
として其夫人のことう子とありて一溪の才子となりて
医者となりて其夫人と名をとりたり 梅花を其夫人と
云医書とありてこれと代根とありて才子の

分限とありてこれとありて又其夫人も
宝丹玉丹と云其夫人の名其夫人の甲斐
忠のことう子とありて其夫人のことう子
一其夫人の服所とありて其夫人の密所とありて其夫人の
なり。其夫人の妻と云其夫人のことう子とありて其夫人の
は其夫人の妻と云其夫人のことう子とありて其夫人の妻の
なり。其夫人の妻と云其夫人のことう子とありて其夫人の妻の
別と云其夫人の妻と云其夫人のことう子とありて其夫人の妻の

は妻よりしてまことの徳を江戸に居り
先在断一川とる江戸一町に宿ふせんと
約して毎夜まるとなりて徳を子たの方
一也して一版を食して膳を減ふ十片と
うて何れ何れもして色を人の費とな
らば上京して東福寺開山とてゆく多抱たを
流るれくも通を幼とて父を斎持る
是も開山とてゆく徳を物とて

宿と通を付ひて徳を才子とて徳をて父
告てその大器の中徳を才子となすてのる
化の師として教導せしめて辞退はる

林氏藤姓

林理齋

道春

實林入子理齋養之号羅浮子

氏ア々法下仕台徳院秀忠公共大猷院家光公
共家綱公正月廿二日卒于東武七十五歳
文敏先生

林々入

林永喜

号擲墩先

春齋

治部卿法下仕大猷院家光公并嚴有院
家綱公 延宝八庚申年五月五日卒六十四

春齋

母号順淑孺人荒川氏女

賜弘文院之官号

早世

春信

林普軒 号孟著弟頼

春宗

春常

延宝八庚申年正月廿二日次春齋家督

仕家綱公并綱吉公号整宇直民甫

万治四年三月十二日卒東武三十八

春徳

号貞毅先生

字敬言

林叔勝

左門

寛永六己巳年六月十九日卒于東武十七

葬東武海禪寺内小岳

○大和の国宇多の近所山部寺と云有りこゝあり競

長せいありとも頼政討死の後こゝあり一牌をたて墓

と建つともあり今こゝあり頼政の墓と云有り

城も有りあり山部寺と頼政。具足并旗系分

有り頼政の紋ハ菫菜の葉に丸に旗とも其紋あり

又東の古河の内にも頼政曲端と云有り是ふも

居たりあり葬たし云有り墓をその人乃

思顧を得たりとの志次ありと云有り建つとの

頼政紋所
菫菜葉
六字九字

麻布古河今八市中三成

るり畢竟ハ首を妹の尾公とりてとりきり
義徳の蓮華寺に葬たり実とも也

○ 榮生と云老江が葦浦に住して地侍のやう
なりとのなりと云ふなりて居る聖徳太子の
比よりの老近江ハ親善寺の家来のやうなり
あり今なほなりなり
延宝四年

○ 吉川 惟足年五十三初まを堺にて張相屋を建て
と云て藥屋なり江戸にて藥屋を建て
数手

居てそ職と云ふなりそ業屋なりそ後惟
足は徳倉に居たりそ後河内清和にあり熱社
之内に神代と云ふ所の後より萩原への
志はしめて大徳寺の清和と云ふのうて元來の
遂に神代を神代と云ふ印可なりて萩原の
遺言ありて大なりも惟足はありて吉田
屋へ成長ふは傳ふなり也吉田兼菴
法皇ハ神道の大きき吉田の所ありて例

一 惟足傳なりと申す所にて芝山庵へ惟
足と傳ふ惟く以尋なり 惟足申すハ木綿繼
子也云々此昨磐坂西受口決不殘相傳^{其上}萩原
京狀ありて出さるるて兼菴開口
法皇の位ハ木の大なる吉田ハ男子なる多しハ婦人
となりて傳へおき男子に傳へ吉田家の所あり
くる例なり ありやとのるをききて惟足
をハ中吉田の家ハ男子なり 是時ハ若狭ハ

氣^他 あたぬ神といふ社ありて神まゝ傳へおきく
まより吉田へ傳へいつりおき一実なり然れども
是も此下までハ何れとも神職の者なれど常
の者と遠く萩原庵惟足をより思ふれ志さ
しを感し多かる印狀すてき數なり 木の大
なるハ吉田と云りふてまの子萩原へも傳へと云
事 一 那 木綿繼くややるものハ神乃と説く
れと也 木綿繼も危狀と吉田よりおき木綿繼

繼錢差

ハッうち六ッうちと有り申一玉極のやうに
ハッうちなり惟是なりと云ふる祢書と
構ふる時々の法の時とてやうなるなり祢
代の巻のうち木綿縫といふなり可考
吉田の市状ハ神祇長上ニ告るゝと書て朱下
と押なり

○徳倉の大別 高と云ふ古ハ社傍の口跡なり今ハ
是ハたゞ小別高なりなり是も社傍なり

○兼好 弘安五年生觀應元年四月八日六十
八歳入寂雖有異説古老所傳如此高野山西
光院有位牌云々

園太暦ハ觀應元年三月三日兼好法師在伊賀
罹病之由有其聞癸心之隨僧尤可惜之由依
上皇之勅典藥院和氣清元赴彼地且給米
三十石

七日自伊賀国橘伊賀守成忠馳使使

奏云沙門兼好法師老病弥難治典藥頭
嫌用之且先生死無常之急者急門之所
喜也振頭不用藥典藥頭須歸否未穀則
充行近村之士民云旧友也依之為問病潜卦赴
伊賀國云

十五日天晴吉田社司卜部兼頭四男修行因
緣兼好法師卒右法師者少仕後宇多
院又仕先帝既歷三代詠花月吟雪月

感會者定離盛者必滅之道理而出神家東

漂西泊既十五年于此中比伊賀權守橘成忠

招之

成忠伊賀國
荒木郡

故赴伊賀國居成忠之亭三

年通成忠之女

中宮小倉病患
皇居十七次

詠此歌事頭而兼好密出伊賀國到桑名赴木曾

路詠和歌又見信濃更科月詠和歌往所有逸

歌東行事終而又住吉田山並岡麓成忠猶慕旧

友之縁而赦前非以招之再赴伊賀國見山
麓由井庄摘菴遂往生素懷云十八日兼好
卒云自成忠許注進上皇主上并諸院后觸
縁浪節御感淚不淺云

二十一日換草菴内法華經八卷自筆老子
經源氏物語須磨明石之卷并頓阿自筆
幻卷神代卷二卷書捨二包黑衣二襲其
外者平夕之宿衣之衾食椀等也同右

命松丸就良基之家司献兼好生前之
一首并病中之詠

わがなまきあるりもきりてねをねふはまうとを
うき人のいふるねゆき世きりにてをきりてを
め

右ハ病中ノ詠

わがふくききぬのりやうきうきうきあまの月

右生希玄月亦八日詠之

二十九日米穀五十石鳥目千貫賜之召遍照

寺僧令葬伊賀國分寺

觀應元年

俗名左兵衛佐

兼好法師墓

二月廿五日

卜部兼好朝臣

塔ノ首ヨリ 墓ノ下マテ

五尺三寸

上ノ幅二尺

右園太曆ニ不見今現在伊賀國由井庄ニアル所也

宗建按園太曆此夏無所見但此日諸本漏脱而此人似不園太曆文例若他

記欵猶可考

園太曆曰貞和二年閏九月六日陰晴不定兼好未和歌數寄者也召簾前謁之云貞和四年十二月廿八日兼好法師未武藏守師直館謀狩衣之事共談之

○本阿弥元祖妙如と云ふの事氏上流の〜に從德倉妙如と云ふ〜と云ふ妙如ハ三百年忌に云ふ年より幾分〜と云ふ後東山殿のと云ふ阿弥

と云ふの妙本なり

本光 光二 光境 光二 実子なり 他家のものと

光室 光温 光温うて妙本なり 十一代目也

光室もむきえなりうてその女を有りて松

田氏と嫁そそ家の子尋ねてある買豊後書

本の所よりなりこれ光傳なり然る時

光伝とある家の秘するをたへある光徳と光伝

あねむこなり大岡治世のとき伝する家地と載

えりて松木將の公方眼山よりハかふも何事

らむと大岡怒くこふ公方ハ再い玉の天下

かきむと思ひ豊くかふと載やれぬと

伝くともてききむい家と傳る三つの叙とた

てまつらるいふより鬼丸とて栗田五郎

の作られ楠正成陣太刀なり二尺六寸なり

いふけさや伝はむとささの伝をさくら伝乃

ふはかんとうすてはむりせうともかく
の上とぬくにぬりけてはうのつもの上へ
やうとちうとこの太刀をはなれ光徳
こうとテ今あふなり二銘と申はあ作なり
家の秘事あて銘とはうはは愛宕山
たふと毎年二季の彼岸に水阿波あ
こ一上りぬく又大傳と申は傳と三他の
光世、作うれと古肥前ちあふ今も有

鬼丸のちうと細川玉齋うれと家
うれと烏丸殿とうれと今烏丸殿の
あうり

近衛基照公嫡女安君甲府宰相信子甲府
中将の室うて延宝七年十一月廿六日江戸
ゆふ湯名残の湯日年十月廿六日朔卯上河津
湯所とあふ南都へ赴ふ日十一月うふ
里あ

宗按後小甲府中將家宣為將軍之時
安君叙一品家宣薨逝後号天英院元
久六年二月二十八日薨七十又葬于増
上寺

○桑屋の元祖情延と云は旧條中將と桑屋なり今
中將と云うて云いさうとのゝてなかり
と云は旧條トル新町の西側の中將の店
前と栗柿と云うと桑と云ふ家と云ひ宿と云

道朝カ子
道清

梨樂の時分と信衆と云ひ又氣障と情延と云
んとりまふり三河の商と云うてかゝり入
と後今の新町三条より二町目の東側まで
家康公の旧宿の情延と云は元祖と云ふ宗古川の
屋敷と情延山と云ふの子道朝と云ふ婿と桑屋と
云ふ道朝と云ふなり上柳は旧條坊の東洞院西
小角の東南始ハ方連と云は町と上柳の町と
云ふは米屋と云ふ身帯と云ふと新町の

松本より後より傳へて甫斎は彦十郎とて
さ^酒めて自刃塩とて家康公むくしの業を
二階宿より討て塩屋彦十郎と大久保相模殿の
宿より二階より相討て居る事も大に
震也^もより下より小姓か^くく位なりま
業のとり立てて市販と業の陽を中豆
賣として末年上洛し大名をよりんと云
と元和七年に大災より焼ゆ^く古井大炊殿

ともい^まりて銀千枚は^くは^くして家と
三浦殿は伊豆の三浦の百姓とこの所中の女と
大炊殿毒^くは^くより大炊殿を^く甫斎を
春日殿の宿として丹後殿を^く曾谷は
に市^くと縁夫と^く業を道^くなりたて
松平宿前殿より入伊豆殿より入今の可と
て宿前殿の用と^く石井宿前殿の業入と家喝^く
金七十枚小買この時業を^くねと^くか^く

多うとこの時までもあつて、も葉入のり
今、ぬの花入の利休々々なる夜長と云ふ
~~~~~の玉入のり  いなり 五十嵐宗林  
も葉屋のとりまへこれ葉屋江戸へ行く  
ゆく形

○中井主水ハ橘氏まで近江侍と云ふ候の大工  
役ハ今の主水<sup>お</sup>すて三代より安室山<sup>あむやま</sup>の葉の  
大工まで古より代々方家の大工まで大和より

古き家なりきれとも大和の威勢の時より候と  
さうて候よりの知りなり昔より祇園と小聖  
の棟梁なり近頃までこの両所へ後馬くる時ハ  
人をあせと申来るハ大工と云へてうへに料  
鳥目十足にりて通なり先年祇園の造  
営のときも小左衛門棟梁よりさうて三条の  
小左衛門町へ安室石のありたるともあつハ  
誓願寺の方丈の庭よりりこの石の町あり



弁菱と申すものなるをいふと小倉のつゝ申すは  
明智の<sup>代</sup>時木津川の邊まで遠くは今の  
小倉の親おくを方ハつくゝととて遠くは  
弁菱石の町とありと申す若木のように  
名としていふ海にひきかれより弁菱といふを  
申すまより伊勢の白子までいふ舟までいふりい  
と時大かまで精を却し肝菱也といふ弁菱なり  
はるさめのとてはより弁菱といふなり

中古五條の大坂所の處あり祇園の遠旅なり  
一時小川より已町まで遠くをいふなり  
以て町といふもの名今の祇園の遠旅所と  
小倉のるれお例の社に内よりいふハ社の  
前まで遠くをいふなり

○榮徳を四十八とて死すは眼とて作付とも辞  
退る東宗秀は法眼とて今豊玉の神前にて  
馬より片と持野は眼とて今東宗秀は片ハ持



野山樂なり栄徳う子に右京といふなり下  
右京と云ふの才に右近と云ひりいへた右京を  
嫡はなれども男子なりしうて右近う子の庶子  
今の永吉を養て子として右京と号し元信  
子正業も法眼を依て元信を世に右法眼  
と云ひりいへた右京も入りて後ふ法眼  
となれり又長谷川文藏ハ長谷川等伯う兄十  
ハヤとして大死を今の御方の御殿の二十

四孝の録ハこの有りなり

法印探幽齋狩野守信碑誌并銘

延寶二年

甲寅

十月七日法印探幽齋狩野守

信病而没于家寿七十三葬於池上本門寺  
明年乙卯小祥忌其子探信探雪不耐悲  
慕立碑墓畔而請辭於弘文院學士林  
叟未成童時知探幽於京師之宅東  
来之後或遇於營中或會於保伯之家略



頻々今既永訣豈不哀情哉乃據家譜為  
之作辭曰下畧

○狂言の鷺河浜の時鷺河浜と云同朋狂  
言師ありそ余も出てハ鷺河浜を以て次子河浜  
子孫なるありハ利休と云類ありてこの  
鷺河浜と云さきのもの狂言よりある  
也ハ鷺河浜と云るなり此名を以てす  
やんとさせしにすせぬと云小可もこの

寶生

○鷺河浜の作まで東山殿の傍龍毫の兄小姓と  
云たるなり惣別は人の作の宴也多しなり  
保生座なり今ハ觀世座なり  
○季周文 地豆 俗名式部 越前朝倉家老  
季周文ハ唐人なり未だして越前朝倉家老  
にして位を付け絵の上より之朝倉の家老と曾  
我某女子斗りて男子なり周文を右の女子  
と書て家督と云ふ子ハ地豆なる直に吾我



氏とて曾我式部と云後、地とは  
諱ハ家譽也即真珠菴、代々の牌も有り  
真珠菴賢首座持り也世々雪舟の師の周  
文と云なりと云與彦菴傳、有僧周文、雪  
舟の師と云ハ、ハあやまり、互相云ふの傳の  
周文とハ別人なりと云されとも李周文と名  
下あるた、ある、物畫家の流<sup>衆</sup>見次と云さる  
すとは、東福寺の雪舟と等揚雪舟と東福

寺衆已下と云ふ、みて是なりといふ

○小法師と云ふの穢多なり 禁裏内院の庭  
の掃除又と不淨と云り、清所の大日蓮なるもの  
と云。役なり、さるも字ハ達師、これと八十  
といふ後陽成院のとき大老の小法師有り、孫ハ  
幾人あり、ちたるとあるも八十人有り、と云ふ、それ  
より八十と師を云ハ、熱<sup>領</sup>中<sup>の</sup>名、あるまじき  
堀氏ハ近江佐々木なり、堀丹後も近江佐々木なり



正意の親父は延令院と云て近江豊村の六山院  
の僧に落座後、醫と号し、号徳元柳三場  
より二条より上、武町目東側、酒屋にて住を  
し、後酒屋とは辞て、町二条下、西側  
の南角の家を求ふ時、この浪きて不足なり  
妙順但馬生野の病ふかりて、米高に嫁し  
て、ふあふり、あふり、報を乞ふやされて、うをを  
後、茅原田長無と云會はの空人なり、浪東洞院

下立賣  
京都地名

下立賣、下、東側、小より、二町目、便をせまき一  
正意も入婿なり、内室ハ貞順なり、つて、堀  
對馬守と云人、浅井家の人なり、三ふ石とりて  
秀吉とく、は、宇治の多し、知り、所なり、施  
菜院、秀吉云の、た、金宗と云人の、為、小  
對馬ハ姫いなり、對ると、徳元と、後兄、なり  
職人、歌合、ち、内、つ、と云、の、あり  
平都婆、さ、さ、み、る、即、戒、名、を、か、く、其、の



傍に青花葉く白き細花ありけるなり  
可考

○地——やと云ふもの男、女袴くく白き草の廣  
袖のものをうちけ数珠と首くけ下袴と  
をきてけり金枝の袷、又冬羽衣とも鬚  
ハありて男、女のおね——くちあがり

○白きものうしろに——ろいりものもく云ふ目くま  
をさめの矢を入る物也

墓目賣俗ニイテコウ哉

○大村由己ハ丹後と云く但馬の湯崎入海  
なり美狭の教ふもとゆふ舎下乃傍に  
落陸——て秀吉云乃伊伽とヤとる  
湯記といふ一冊記あり

○新玉津崎くハ尊氏のくは頼阿俗なり  
——時の子なりい事深秘抄りくも  
寛憲寛孝も毎月朔日り——詣り  
足利より方家代く尊崇詠あり



武內十五代孫

是ヨリ僧形

長保二年叙法京

定清

兼清

賴清



本朝法ヲ号始ト云

光清

常盤御房ト称ス

勝清

田中祖藺

女子

待宵小侍従也中納言伊実室

女子

鳥羽院ノ女号養濃局

六宮

道惠法親王

鳥羽院皇子

七宮

覚快法親王

姫宮

双林寺ノ宮

成清

善法寺祖

祐清

サカキハノミコ新古今集ニ入

宝清

号家田

宮清

善法寺

通清

法印北人ノ女藤原院義満公之母也乍去  
実ハ号母而義満才詮満ハ此腹ニテ義満  
之異母才也

康清

通清ヨリ今ノ善法寺

央清マテ十五代也

頼朝卿ノ時勝清ト成清兄才大ニ争アリ

頼朝卿二人ヲ両別當ト被仰出

○時代より人の新うる今にやまらぬ榮徳時



分の繪はる——狩野古右近とて探ふ親を  
とさうまゝいさかやきなり二條城の始の頃<sup>前</sup>の所  
よりせれと平比の所よりまゝ月代より今の  
月代よりいふと高——是時分はちやせれと  
城と見えたり法眼と云も何里

三  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百







